東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2009年6月26日

現代的な諸問題とイスラーム

親愛なるムスリムの皆様。現在の人類の諸問題にざっと目を通してみるなら、そのうちの大部分の根底には道徳的な問題が存在していることがわかります。今日の世界の問題のうちいくつかを挙げてみましょう；一方では信じられないほどの富の蓄積が行なわれ、他方では飢えや貧困があります。きりのないほどの平和の言葉に関わらず、戦争は起こり続け、毎年何十億ドルという支出がなされる恐ろしい武器、占拠、殺戮…。諸民族の独立について語られる多くの演説にも関わらず、現実には強い国家が弱い国家に対し政治的、軍事的、文化的に影響を及ぼしています。貧困、生命や財産の保障の欠如、テロ、暴力、マフィア化、ゲリラ化、女性の人身売買、性的搾取、逸脱、アルコールや薬物への依存、家庭内の悲劇…。

親愛なるムスリムの皆様。これらは、人々の心から真の意味でのアッラーへの愛情と畏れが消されることが、人間世界においてどれほどのことをもたらすのかを示す恐ろしい例のほんの一部です。人の心からアッラーへの畏れが消え始めたなら、その時には、エンドゥルスの偉大な学者であるイブニ・ハズミが語っているように、「人が人に与える痛みは、獰猛な野生動物や怪物が与える痛みよりもずっと大きなものとなる」のです。このために、慈悲の預言者であられる預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）は「あなたがどこにいようとも、アッラーを畏れなさい！」と命じられているのです。そしてこの理由で、イスラームでは「篤信」や「アッラーへの畏れ」といったような概念によって表現される、畏怖・敬意の意味をもつこのアッラーへの畏れがとても重要とされているのです。

幸福の時代と呼ばれる、預言者様の時代を初めとし、この崇高なクルアーンの概念が信者の心の中に位置していた時代には、イスラームの信仰や道徳の基盤は、ムスリム達において深い人間愛、そして被造物への愛を発展させました。世界の他の地域で人々が封建領主や貴族、教会による圧力や迫害を受けていた時代、クルアーンの徳を心に浸透させていたムスリムたちは、統治下にあったあらゆる宗教や民族に属する人々に対し、公正、平等、正義、寛容といった確かな価値のもとに築いた真の道徳的意識やその実践を発展させていたのです。

親愛なるムスリムの皆様。人類の運命に影響を及ぼす移住（聖遷）の準備を行なっている最中に、隣人の糸と針を返すことをお忘れにならなかった預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）、年老いた未亡人の子供たちに、その背で荷を運ぶという偉大さを示されたウマルさま、ローマの匠の苦情に応じ、統治者の命令によって被告席に座ったスルタン・ファーティフ、その日買い物に来た二人目の客を、まだ客の来ていない隣の店へと送った純朴な商人たち…。そう、このすべては、そして無数にあるこのような例は、純粋なイスラームの精神が支配し、受け入れられ、実践されていた道徳的概念は、伝統、文化となった預言者の徳そのものなのです。そしてこの文化の灯り、慈悲、恵みを、今日の人類はまさに必要としているのです。

聖なる三つの月に入ろうとしている今日この頃ですが、この聖なる三つの月が全人類の諸問題の解決への要因となるような善をもたらすことをアッラーに乞い、願います。